

【書評】

大黒弘慈『模倣と権力の経済学』

岩波書店, 2015年, 304頁

大黒弘慈『マルクスと贋金づくりたち』

岩波書店, 2016年, 240頁

『模倣と権力の経済学』は、正統派経済学の自律的・水平的なホモ・エコノミクス仮説の根底に、貨幣における他律性（模倣）と垂直性（権力）が潜んでいることを探究する〈思想史篇〉である。個体を唯名論的な同質の孤立した個（アトム）ではなく、柔軟な同一性を持つ、實在論的な開かれた個（モノイド）にとらえ、アリストテレス以来の「模倣」（ミメシス）が貨幣、競争、株価の基礎にあると見る。具体的には、第Ⅰ部「近代の模倣」がタルドに触発された経済思想史、第Ⅱ部「蘇る類似」がフーコーに触発された社会思想史である。

『マルクスと贋金づくりたち』は、実質上の第Ⅲ部にあたる〈理論篇〉であり、宇野弘蔵の方向性を極端化したマルクス経済学理論と見ることができる。前書から模倣と権力という問題構成を引き継ぎ、「価値」が「権力」に媒介されていて、市場経済はフーコーの生政治を基盤としており、マルクスの価値形態論も単なる貨幣生成論ではなく、そこに資本の統治術への遡行が見出しうると論じる。最終的には、ホモ・エコノミクスに代わりうる主体像と、貨幣や国家に変わりうる価値観と社会像を提示すべく、アリストテレスの「ノミスマ」（貨幣/権力）を標的にするディオゲネスの「貨幣の価値を変えよ」との議論に

依拠して、「模倣」に代わりうる「類似」の真の可能性を提示しようとする。

経済学を「模倣」から見直すべきだとする着想は慧眼だが、その問題意識や理論構成において同意できない点が少なくない。以下、それらを見ていく。

権力をどう見るかが一番大きな問題である。著者は、タルドと高田保馬による、模倣と権力を直結する見方を強調し、本書全体の「権力」論の軸に据える。タルドの『模倣の法則』によると、「模倣とは一種の催眠状態である」。模倣は暗示的催眠による個人の自発的服従なので、他者の模倣は他者への服従を意味し、それは威信への渴望から発する。また、高田保馬は『勢力論』で、経済の根底に見いだす「勢力意志」の根底に「従属意志」を、さらにその根底に「模倣（威信への渴望）」を見出した。著者は彼らの議論に依拠して、模倣と権力は同根であり、個人は何ら自律的意志や自覚的行為を持ちえず、自らの自発的な催眠作用を忘却して否定しているにすぎないと主張する。ここからさらに、アダム・スミスの『道徳感情論』における「同感」をも「相互的模倣」すなわち「相互的威信」とみなし、「同感」は市民的な水平関係ではなく、権力的な垂直関係を直ちに生み出すと解釈する。いわば、模倣を他者への自発的かつ催眠

的な服従や従属ととらえて、模倣を反自由主義ないし全体主義的な方向でのみ理解し、そこから統治術に関わる政治的な意味合いのみを引き出してくるわけである。評者は、このような模倣と権力の理解と人間本性の把握に基本的な違和感を覚える。

「他者の欲求や信念」が「内部から外部へ」、「上層から下層へ」という二つの方向へと模倣されるからこそ、威信への渴望から模倣は生じ、それが他者への従属に直結すると言える。第一の疑問は、こうしたタルドや高田の議論を著者がそのまま追認する点である。

だが、人間が見よう見まねで模倣するのは、先ず、観察できる定型行動、習慣、技能や熟練である。規則や法律のような行動の仕方、価値・規範のような物の見方や考え方は、模倣されるよりも、家族や学校で教育されることが多い。観察できない「他者の欲求や信念」は簡単に模倣できるものではない。そのような内面化された情報は付度する以外にないが、思い込みのような誤解も多いからだ。それゆえ、一般に模倣が「内から外へ」、「上から下へ」と進むとはいえない。こうした「教育」も含む「模倣」（評者は「複製」と呼ぶが）の結果として生じるのは、学習されたデータ、情報、知識の体系であり、if-then ルールの集合であるプログラムの形式を取る。このように模倣の対象を学習可能な知識一般を含むように広げ、タルドの2法則とは逆方向の模倣があると認めるならば、模倣は威信や権力への従属のみへ直結しないはずだ。

「模倣」といっても、ゲーム・ルールの「模倣」と、戦略ルールの「模倣」は意味が違う。ゲーム・ルールに従いつつ、戦略ルールにおいて定石を逸脱することは革新的戦略につながる。これは公正で自由なプレーである。だが、詐欺や賄賂のような戦略ルールを模倣し、結果としてゲーム・ルールを逸脱すれば、それは不正なプレーになる。だが、そうしたルー

ル破りの自由すら常に存在するのだ。

実際、法律や慣習のような社会的ルールに関して、私たちは無自覚に模倣することもある。つまり、社会ルールの存在は、人間がそれに従うこと（模倣や追随）と従わないこと（逸脱や違反）の両方を導きうる。社会ルールに従うことから一定の「自由」が生じるが、それに従わない「自由」も残されている。ルール遵守がプログラムされた機械やロボットと異なり、人間は、ルールにたいする模倣のみならず違反もできることを出発点に据えるべきである。人間の中では模倣・同調と逸脱・反逆が常に同時に共存している。タルドのいう無名の発明・発見の連鎖はこの逸脱・反逆が日常的であることを意味するのではないか。だとすれば、そうした日常的な「類似」の中にこそ「常にすでに」強制と自由の問題が存在し、そこに権力と統治のメカニズムのみならず、自由や公正の倫理が見いだされるはずなのだ。

本書は、「自由」を常に否定すべきものとしか見ていない。だから、平常時における「自由」という視点が欠落している。だが、この可能性を予め含めておかなければ、貨幣を含む制度一般の進化も考えがたくなってしまふ。

本書では、逸脱と反逆の契機はディオゲネスの「贖金づくり」の物語として最後に劇的に導入される。だが、貨幣についても、非日常的な「贖金づくり」ではなく、コインの削り取り、金・銀含有量の変化等に見られる漸次的で小さな逸脱（変異）が本位の変化、兌換の不換への転換といった大進化を引き起こしてきた。貨幣を含む制度一般の進化は慣習（模倣）と予想（逸脱）の相克のダイナミズムから説明されうるのであり、模倣のみでは制度の再生産と定常性しか説明できない。

なぜ著者は模倣や服従とともに逸脱や反逆

の可能性を議論の始めに直ちに導入せず、ディオゲネスへいたる遠く険しい道を歩むことを読者に強いるのか。それは、「贋金づくり」といった特殊状況の中のみ脱権力を見いだそうとする狭隘な問題構成に起因する。そうした体系構成になるのは、著者が自由とは表象であり、常に批判すべきものと見定めており、模倣の根底に威信への渴望が根強くあることを肯定したいからではないか。本書に欠けているのは、すでに見たように、平常時における人間の自由という視点である。

著者は、タルドの権力論を忠実に模倣し、さまざまな場面に適用している。このため、こうした問題はますます拡大していく。タルドの「内から外へ」の模倣という考えを言語から貨幣にも適用すると、貨幣以前の「貨幣を介さない潜在的価値」として「威信」や「優越性」のような垂直性が見いだせるという。これも、上に述べた問題からの派生だといえる。では、計画経済において貨幣を廃棄しても価値計算は可能であり、人間の自由は抑圧されないのか。貨幣の購買力は他律ではなく自律、抑圧ではなく自由をもたらすのではないか。本書にはそうした視点が希薄である。それは、経済学者でいえば、マルクスとケインズへの高評価とハイエクへのシニカルな低評価に現れている。

また、モデルとコピーが主人と臣下の関係にあり、「威信」が効果を発揮するという模倣における「上から下へ」の方向の議論は、経済の上層と下層、奢侈と必需に適用されている。だが、そうした模倣の対象が欲求、思想、信念のような属人的でアナログな情報に限定されている。現代で主流である非属人的でデジタルな情報（商品技術情報、個人情報、著作権情報等）は、オリジナルもコピーもまったく同等である。こうした時代に著者の解釈はどこまで説得力を持ちうるであろうか。

ちなみに、現代の変動相場制下の国家通貨

=中央銀行券は、商品貨幣である本物の貨幣の「代理」という論理（鑄貨の論理）だけでは理解できない。それは慣習や期待に支えられて自己実現する象徴（章標）として存立し、価格の「表現」や「実現」を可能にするが、プラトンのアイデア（真の世界と仮の世界の二重世界）でもない。現代の貨幣をそうとらえれば、ビットコインを投機の具だと一蹴することも、地域通貨をシニカルに語ることもないのではないか。また、ディオゲネスの可能性の中心である「貨幣変造」（多次元的質の転換と解釈可能である）を、真贋の階層秩序を前提するプラトンのアイデア観を引きずって「贋金づくり」（真贋二元論ないし一元的量）と呼ぶこともなかっただろう。

〈理論篇〉最終章で、ディオゲネスが受けたという神託の意味をフーコーや山川偉也に依拠して、こうした貨幣の質の転換を意味する多義的な言葉として「汝の貨幣を再評価せよ」、「貨幣の肖像を変更せよ」、「汝の貨幣を変質させよ」、「真贋見極めよ」等々とさんざん検討したのに、結局、価値「量」を問題とするとも読める曖昧な表現——「貨幣の価値を変えよ」——を二冊の本のサブタイトルに与えている。それは、商品に内在する貨幣以前の「不可視の価値」の「表現」を暗示するためなのであろう。では、価値実体=労働でない「不可視の価値」とは一体何なのか。この最も肝心な概念にはアクシア（原価値）や超越論的仮象といったアイコンが付されるのみで、それが量なのか質なのかすら曖昧なままにされている。

著者は、柄谷行人の「交換様式論」（A. 互酬、B. 略取・再分配、C. 商品交換、D. アソシエーションの交換）を無批判的に模倣し、その枠内で思考している。評者は、「交換」の必要条件は「等価性」ではなく「同時性」と「相互性」にある（二者間の物々（直接）交換に「等価性」は必要ないから）ので、K. ポ

ランニーと同じく、贈与・返礼/贈与円環を非同時的に形成する「互酬」や、中心への集中・分散を非同時的に行う「再分配」を「交換」と明確に分けるべきだと考える。そして、交換、互酬（純粹贈与を含む）、再分配が構成する3次元空間として「交通」ととらえ、「地域通貨」とは交換と互酬の結合を目指すものだととらえるので、柄谷のように、それらと異なる独立の第4の交換様式（地域通貨？）がある（ありうる）とは見ない。評者の知る限り、著者のいうように柄谷が「贖金づくり」として地域通貨を自ら実践したことはないが、著者はこの点を自ら確認したのだろうか。

著者は、柄谷以外にもタルドやフーコーなど権威ある様々な論者の概念や言葉を忠実に反復することで、威信への渴望から権力を生み出すタルド＝高田的「模倣」を繰り返すばかりで、ディオゲネス的「類似」（根源的類似）を自己の心身によって犬儒派的に実践していない。二冊の著書を通じて思想的統一性を求めてあちこちを模倣した結果、概念と論理が

不整合となり、全体を通じて理論的な首尾一貫性が失われたのではないか。

本書の可能性の中心であるディオゲネスの思想をむしろ全篇にわたり徹底化させ、タルド＝高田的な「模倣」や「権力」といった概念を再考すれば、〈思想史篇〉のタイトルは『模倣と権力の経済学』ではなく、むしろ『模倣と類似の経済学』になるのではないか。本書をキュコニス主義の「真理の勇氣」を保つべき学問（科学的理論）の体系と作法に照らし合わせる時、こうした疑問が残った。

ディオゲネスが求めたのが世界貨幣でも世界市場でもない以上、彼が自称した「コスモポリタン」を「類似」の視点から考えてみれば、それは唯一の正しい「グローバル市民国家」（世界市民国家＝世界共和国）を含むあらゆる「国家」を超えながら、しかも「ローカル」（局所近傍的）に「自足」できるような、ごく日常的な「宇宙市民」と見るべきであろう。

（西部 忠：北海道大学）